

# 基体述語のアスペクトをきりとる接辞「たて」についての考察

山 田 昌 史

An Analysis of the Japanese Adnominal Affix ‘Tate’

Masashi YAMADA

2015年11月20日受理

## 抄 録

本稿では、動詞に接続し連体修飾節を構成する接辞「たて」を取り上げ、その意味的、統語的特徴を整理し、この接辞を中心として構成される構文（本稿では「たて」構文と呼ぶ）の生成メカニズムを提案した。「たて」構文が生成可能な動詞は、位置・状態の変化を含意するが、その変化が語彙的に指定されていない動詞である。また、この構文の主名詞は、典型的には他動詞の被変化主体である内項であるが、動作主も動詞の表す状態や位置の変化を被る主体と同一であれば、この構文の主名詞となれ、また、被変化主体が変化の様態を表すオノマトペ、被変化主体の一部であるものも主名詞として生じる。このような「たて」構文の特徴を理論的に説明するために山田(2005)の概念意味構造による提案に加えて、被変化主体のクオリア構造を合わせて仮定することで、これまでの理論的枠組みよりもより広い事実を説明できることを示した。

キーワード：「たて」構文、動詞のアスペクト、連体修飾節、概念意味構造  
クオリア構造

### はじめに

本稿では、接辞「たて」を取り上げ、その意味的、統語的特徴を、先行研究を踏まえながら整理し、この接辞を中心として構成される構文（本稿では「たて」構文と呼ぶ）の生成メカニズムを概念意味構造とクオリア構造の2つを援用して提案する。

森田(1989)は、「たて」構文の基本的な用例の観察から、接辞「たて」は、『動詞の連用形に付いて体言化させ、その行為がなされてからあまり時がたっていない意を添える。(森田(1989):662)』と述べている。また、山田(2005)は、「たて」が付属する動詞の語彙意味と項構造の観点から森田の扱った例を再検討し、概念意味構造を用いて「たて」が付属する動詞の特徴に理論的な説明を与えている。さらに、向坂(2013)は、山田が取りあげなかった基体動詞の動作主を主名詞とする「たて」構文について観察し、一般化を導いている。これ以外でも、これまであまり観察されてこなかった接辞「たて」の働きもある。本稿は、先行研究で取り上げられてきた言語事実に加え

て、これまで十分に観察されてこなかった例を含めて考察し、接辞「たて」が接続する動詞について、また、被修飾語となる主名詞について新ためて一般化を提示し、「たて」構文の生成メカニズムを概念意味構造と Pustejovsky (1995)、小野 (2005) 等が提案するクオリア構造の理論を援用して、これまでの理論より網羅的で一般性の高い理論を提示することを目的とする。

本稿の構成は以下である。1 節では、先行研究 (森田 (1989)、山田 (2005)、向坂 (2013) 等) で観察された基体述語と項関係がある要素が主名詞として生じる例について精査し、新たな一般化を提示する。2 節では、基体述語と項関係にない要素が主名詞として生じる「たて」構文について観察して、基体述語や本来生じるべき主名詞との関係に注目し、この構文の成立要件について議論する。3 節では、1、2 節での観察によって得られた一般化をもとに、基本的には山田 (2005) の概念意味構造を用いた「たて」構文の分析を拡張し、また、Pustejovsky (1995) 等の主張するクオリア構造を山田 (2005) の分析に組み入れて、「たて」構文を生成する理論的基盤を提案する。最後に 4 節で本稿をまとめる。

## 1. 接辞「たて」と動詞の項構造との関係

本節では、接辞「たて」の基本的な性質を、森田 (1989) の観察からまとめ、特に、この構文の基体となる動詞と項関係にある要素が主名詞として生起する例を観察し、「たて」構文が成立する要件について一般化を試みる。1.1 節では、森田 (1989) による「たて」構文の一般的な特徴についてまとめ、1.2、1.3 節では、主名詞が基体動詞の内項 (被変化主体) となる例 (c. 山田 (2005))、主名詞が基体動詞の外項 (動作主) となる例 (向坂 (2013)) についてそれぞれ検討する。最後に、1.4 節において全体をまとめ、接辞「たて」の意味と働き、そして、この構文に生じる基体動詞の特徴について一般化を行う。

### 1.1. 森田 (1989)

本節では、森田 (1989) をとりあげ、「たて」構文の基本的な性質についてまとめる。

森田は、接辞「たて」は、動詞の連用形に接続し、それを体言化する働きを持ち、意味的には、基体動詞が表す行為がなされてから、あまり時間が経過していない、つまり、行為が終了した直後であるという意味を添えんとする。基本的には他動詞に付き、他動行為によって生じた事物が生じて間もないこと、また、まだ新しい状態であることを表すとされる。例えば、「塗りたての壁」の場合、「塗る」という行為が終わった直後の状態を「壁」が有しているという意味となる。

接辞「たて」が接続するのは他動詞が主であるが、他動詞であればどんな動詞にも接続できるわけではない。以下のように、「作る」には付くが「壊す」には付かない。また、同じ「産む」に接続した場合でも、主名詞が「卵」であれば文法的だが、「あちゃん」の場合は非文法である。

- (1) a. つくりたての料理  
 b.\*壊したての建物  
 c. 産みたての卵  
 d.\*産みたてのあかちゃん (森田 (1989) : 663)

森田 (1989) は、接辞「たて」は結果の価値に人為的意味を持つような場合、つまり、行為によって生じる結果の価値をとりたてる場合に接続が可能となすとする。(1a)では、作られた料理には温かくておいしいという価値が伴うが、(1b)の壊された建物にはいかなる価値も生じていない。(1c)の卵の場合は、ニワトリが産んだ直後の卵には新鮮さという価値が生じ、その後、その状態が変化していくが、(1d)では、赤ちゃん自身に出生直後の価値が見いだせず、その後、価値の変化が生じることがない。このため、(1d)は非文法である。このように、接辞「たて」は、基体となる動詞が表す行為の結果、何らかの価値をもつ名詞を主要部に生じさせる。

また、以下のように、自動詞に接続する「たて」があることを観察している。

- (2) a. 東京へ出たてのころ  
 b. 風呂から出たて  
 c. 入りたての新米社員  
 d. 結婚したて (森田 (1989) : 663)

これらの例では、「出る」「入る」「結婚する」がそれぞれヲ格名詞をその目的語にとらない例である。これらの例の主名詞は、「ころ」「時」などの時を表す主名詞がくることが多い。これらの例でも、生活における特殊な意義をそれぞれが表していることから、(1a)(1c)の例と同じように行為によって何らかの価値が生じる場合に接辞「たて」の接続が容認されるとされる。

このように、森田 (1989) は、接辞「たて」は、(i) 動詞の連用形に接続し、基体動詞の表す動作が終了した直後であるという意味を持ち、(ii) 動作によって引き起こされた結果に人為的価値が生じる場合、その動詞に接続し、被変化主体を主名詞として表出させることを明らかにした。この分析によって、接辞「たて」の基本的な統語的、意味的な性質が明らかにされた。

## 1.2. 山田 (2005)

前節では、森田 (1989) を概観し、接辞「たて」の基本的な性質を明らかにした。本節では、山田 (2005) の「たて」構文に生じる主名詞と基体動詞の項構造の関係についての分析を概観する。

山田 (2005) は、基本的には基体動詞の内項が「たて」構文の主名詞になることを観察している。以下のように、他動詞の内項は「たて」構文の主名詞となるが、外項はならない。

- (3) a. とりたてのトマト (cf. トマトをとる)  
b. ぬりたてのベンチ (cf. ベンチをぬる)  
c.\* とりたての農家 (cf. 農家が (トマトを) とる)  
d.\*ぬりたての大工 (cf. 大工が (壁を) ぬる) (山田 (2005): 271)

また、非能格動詞からは「たて」構文が生成されないが、非対格動詞からは生成される。

- (4) a.\*笑たての赤ちゃん  
b.\*走りたてのランナー  
c. 固まりたてのゼリー  
d. 凍りたての湖 (山田 (2005): 271)

これらの例から「たて」構文の主名詞となるのは、動詞の内項であるといえる。しかし、動詞の内項であっても、「たて」構文が生成できない例が存在する。

- (5) a.\*見たてのテレビ  
b.\*読みたての小説  
c.\*たたきたての肩 (山田 (2005): 273)

(5a-b)の基体動詞は活動動詞、(5c)のそれは接触・打撃動詞 (cf. 影山 (1996)) であり、どちらも内項の状態変化を意味しない動詞である。一方、「たて」構文が生成される例は、基体動詞が結果を含意するものである。

- (6) a. しぼりたてのミルク  
b. 書きたての論文  
c. 作りたてのおべんとう  
d. 挽きたてのコーヒー豆 (山田 (2005): 274)

(6)の例では、「しぼる」という動作の結果、「ミルク」が生じている。他の例でも同様に、基体動詞の動作の結果、生じているもの(生産物)が主名詞として生じている。このように基体動詞が、ある動作の結果、あるものを生み出すこと意味を表すもの、いわゆる作成動詞が基体動詞の場合、「たて」構文が生成する。

また、以下のような変化動詞でも「たて」構文が生じる。

- (7) a. 揚げたてのコロッケ  
b. 温めたてのスープ

c. 染めたての髪の毛 (山田 (2005): 274)

(6) の例とは異なり、(7) の例では基体動詞の出来事の結果として生じるものが主名詞として生じているものではなく、基体動詞が表す行為の前後で主名詞の物体が存在している。しかし、その行為の前後で主名詞の状態が変化している。このことから、「たて」構文の基体となる動詞は被動作主体の状態変化を表すものであるといえる。

しかし、状態変化を表す動詞でも、「たて」構文を生成できない例がある。

- (8) a.\*壊したてのおもちゃ  
b.\*潰したての空き缶  
c.\*曲げたてのはりがね (山田 (2005): 275)

(8) の例は達成動詞を基体とするもので、主名詞が基体動詞の動作の結果を意味するが、「たて」構文が生成されない。状態変化を表す動詞でも (7) と (8) で文法性が異なる。(8) の達成動詞の場合、動詞に変化の最終局面が完全に含意されている。例えば、「壊す」という行為がなされれば、必ずその被動作主体は壊れた状態に変化する。その一方で、(7) の例では、変化の最終的な状態が動詞に含意されておらず、変化の方向性のみを意味している。つまり、揚げる行為によって、必ず、こんがりと揚がったものが作られるわけではなく、ある程度の揚げ具合の差が行為の結果生じる。このように、基体動詞によって表される行為によって被動作主体が変化することは含意するが、その変化の最終的な状態については、動詞自体が完全には含意しない。

山田 (2005) は「たて」構文を生成する動詞は以下の特徴を持つとする。

- (9) a. 述語の描写する行為の終了後になんらかの生産物が生じることを予測する作成動詞／人・ものが生ずる出現・発生動詞  
b. 述語の描写する行為によって影響を受ける要素の変化を含意するが、その変化を完全に含意しない変化動詞 (山田 (2005): 277)

このように、(i)「たて」構文の主名詞は基体動詞の内項であり、(ii) その基体動詞も表す出来事は、状態または位置の変化は含意するが、最終的な状態を完全には含意しない動詞であることが明らかになった。

次節では、山田 (2005) では非文法的とされた動詞の外項が「たて」構文の主名詞となる例について議論している向坂 (2013) を概説し、「たて」構文の成立要件をさらに詳述する。

### 1.3. 向坂 (2013)

向坂 (2013) は、主名詞が動作主となる「たて」構文を観察している。主に自動詞を基体とする「たて」構文については、森田 (1989) が『自動詞も自動行為の実現によ

て、行為主体に何らかの意味が結果的に生じる場合（森田 (1989): 662-663）に、「たて」構文が生じると分析しているが、向坂は自動詞・他動詞を基体動詞として持ち、主名詞がその動作主となる「たて」構文の観察から、森田のいう「何らかの意味」が具体的にどのような意味なのかについて、(10) のような例から明らかにしている。

- (10) a. 薬学部を出たての新人  
       b. 小学校に入りたてのお嬢ちゃん  
       c. 巴里へ来たての外国人の男たち (向坂 (2013): 208)

一般的に、自動詞 (cf. 「出る」「入る」「来る」など) は、動作主の移動を表すが動作主の状態変化を表さないものが多く、また、他動詞の場合でも、動作の主体や動作始動の担い手となるもので、外項の状態変化を表さないものが多い。しかし、向坂は、(10) の例で、変化の直後の状態を修飾する「たて」が付加するという事は、これらの例では、動作主の状態変化や位置変化を表していると分析している。重要なのは、(10) の例で「薬学部を」「小学校に」「巴里へ」はどれも動作の着点を表しており、この着点が生じない「出たての新人」「入りたてのお嬢ちゃん」「来たての外国人の男たち」は非文法となる点である。このことは、基体となる動詞はそれらの場所への移動とそこへの到着を含意するといえる。また、これらの例では、以下のように主名詞となっている動作主体が「たて」が付属する動詞の出来事の結果として「ある状態になる」という状態変化を表す構文に言い替えられる。

- (11) a. 新人が薬学部を出る。 「薬学部の卒業生になる。」  
       b. お嬢ちゃんが小学校に入る。 「小学生になる。」  
       c. 外国人の男たちが巴里に来る。 「巴里の人になる。」 (向坂 (2013): 209)

このことから、動作主の属性の変化、特に、その変化が生じた直後の状態を「たて」によって示しているという。向坂は、さらに、益岡 (1987) の属性述語の特性をもとに、以下の例から、(10) の例のように動作主が主名詞となる場合、そのもととなる動詞は属性述語であると主張している。

- (12) a. 新人は薬学部を出ている。  
       b. お嬢ちゃんが小学校に入っている。  
       c. 外国人の男たちはパリへ来ている。
- (13) a. 新人は薬学部の卒業生である。  
       b. お嬢ちゃんは小学生である。  
       c. 外国人の男たちはパリの人である。 (向坂 (2013): 209)

(12) では、(10) の基体となる文を「ている」形にしたものである。どの文も、状態変化の結果が継続されていることを表す文となっている。そして、(12) は、(13) のように名詞述語文に言い替えられる。これは、接辞「たて」によって形成される連体修飾節が表す属性を、「たて」構文の主名詞が有していることを意味している。また、以下のように、属性述語の解釈をもつことは、独立した時間を表さないこととなる。このことは、(12) の各例が「今～ところだ」を付加できないことから確かめられる。

- (14) a.\* 今、新人は薬学部を出ているところだ。  
b.\* 今、お嬢ちゃんが小学校に入っているところだ。  
c.\* 今、外国人の男たちはパリへ来ているところだ。 (向坂 (2013): 210)

このように、主名詞が動作主である「たて」構文は、基体となる述語文が状態変化の結果として生じる属性の解釈を持っていることが分かる。このことは、以下のような例が容認されないことから確かめられる。

- (15) a.\* 笑いたての赤ちゃん  
b.\* 働きかけの太郎  
c.\* 壁を塗りたての大工  
d.\* トマトを取りたての農家  
e.\* 英語を教えたての花子 (向坂 (2013): 210)

これらの例を、以下のように「ている」形にした際に、状態変化の解釈ではなく進行中の動作を表している。

- (16) a. 今、赤ちゃんが笑っているところだ。  
b. 今、太郎は働いているところだ。  
c. 今、大工が壁を塗っているところだ。  
d. 今、農家はトマトを採っているところだ。  
e. 今、英語を教えているところだ。 (向坂 (2013): 210)

(15) の非文法性は、「たて」によってとりたてられる主名詞が、基体動詞の表す出来事によって位置や状態の変化が引き起こされず、また、(16) のように元の文として属性述語文を持っていないことに起因している。このように、動作主が主名詞となる「たて」構文は、基体となる述語文が属性の解釈を持ち、主名詞として生じる動作主が、基体動詞の出来事によって被変化主体となることでその生成される。

本節では、向坂 (2013) の主名詞が動作主である「たて」構文についての分析を概観した。前節の山田 (2005) では、(15) のような例から動作主は「たて」構文の主名詞とならないとされたが、主名詞となる動作主が被変化主体としても働く場合、「たて」

構文が成立することが向坂 (2013) の研究から明らかとなった。

次節では、ここまでの 3 つの研究についてまとめて、2 節へとつなぐ。

#### 1.4 まとめ

本節では、ここまで述べてきた 3 つの研究についてまとめる。

「たて」構文は、森田 (1989) が指摘するように、基本的には動詞の連用形に接続し、基体述語の表す動作が終了した直後であるという意味をもち、動詞が表す行為の結果に人為的価値を持つことを表す。基体動詞の項構造と主名詞の関係に注目すると、主名詞が基体動詞の内項要素となる場合は、基体動詞が作成動詞、出現・発生動詞、または、変化を完全に含意しない変化の指向を含意する変化動詞のいずれかの場合、「たて」構文が成立する。また、主名詞が基体動詞の外項要素となる場合では、向坂 (2013) が指摘しているように、基体動詞が単に動作を表す動詞ではなく、動詞が表す出来事によって動作主自体の位置や状態が変化することを表すもので、基体となる述語文が属性解釈を持つ場合、文法的な「たて」構文が生成される。このことから、「たて」構文の主名詞は、動詞の内項、または動作主のいずれであっても、被変化主体と解釈される項であると分析できる。そして、「たて」は、このような動詞が表す行為によってもたらされた変化のありようが終了直後であり、その変化状態が以前と比べて価値があるということを表すといえる。

次節では、基体動詞と項関係にない要素が主名詞として表出される「たて」構文について観察する。

## 2. 基体動詞と項関係にない要素が主名詞となる「たて」構文

前節では、接辞「たて」についての 3 つの先行研究について、それぞれの研究が観察する事実を中心に議論し、一般化を導いた。本節では、これまでの先行研究では詳細に観察されてこなかった、主名詞が基体動詞の項ではない「たて」構文を観察する。

まず、以下のようなオノマトペが主要部となる「たて」構文を観察する。

- (17) a. 揚げたてのアツアツ
- b. やきたてのほかほか
- c. 獲れたてのピチピチ
- d. 出来たてのほやほや

これらの例では、主名詞に生じるオノマトペは、基体動詞の項構造に指定されない。(17) の主名詞は、基体動詞の行為によって生じる結果状態を示している。例えば、(17a) では、揚げた結果、その揚げたものの状態のありようが「アツアツ」であることを表している。同様に、(17b-c) の「ほかほか」「ピチピチ」の例でも、生じたもの自体を表しているわけではなく、基体動詞の行為によってそれに生じる新たな価値として見なされる結果状態を表している。しかし、(17d) の例では、主名詞となるオノマトペ

が基体動詞の表す出来事と関連しているものの、生じたものの状態を表しているわけではない。この例では、その動作が終わった直後であることを表しているのであって、行為の時間が終わって間もないことを表している。

また、以下の例でも、基体動詞からは予測されない要素が主名詞として生じている。

- (18) a. もぎたてのおいしさ (cf.\* おいしさをもぐ)  
 b. 炊きたての甘み (cf.\* 甘さを炊く)  
 c. 焼きたての香り (cf.\* 香りを焼く)  
 d. 摘みたてのバラの香り (cf.\* バラの香りを摘む)  
 e. 入れたてのコーヒーの香り (cf.\* コーヒーの香りを入れる。)

これらの主名詞は、どれも動詞の表す出来事の変化主体全体を表しているのではなく、その部分を表している。例えば、(18a)では、主体動詞「もぐ」の表すできごとの被変化主体である「りんご」に直接言及せず、その行為によって生じる価値「おいしさ」をとりたてている。同様に、(18b)でも「炊きたての(ごはんの)甘み」というように、「炊く」行為によって被変化主体に生じる新たな価値を主名詞としている。これらの価値は、明示されていない被変化主体の部分を表すもので、(17)の例と同様に基体動詞の項構造から予測できない。これらの例では、被変化主体を後景化し、その被変化主体に生じる価値を前景化して主名詞として表出していると分析できる。

さらに、以下の例では、主名詞に時を表す語が生じており、基体述語の項構造から予測できない要素が主名詞となっている。

- (19) a. 大学に入りたての頃  
 b. 就職したてのとき  
 c. 洗いたての場合  
 d. パーマをかけたての状態

これらの例でも、基体動詞が表す動作の出来事によって生じた直後の「時」「状態」等が、それ以外の「時」「状態」等よりも価値があるものとして主名詞に取りたてられているといえる。

接辞「たて」は、さらに、軽動詞「する」を基体動詞として選択する。

- (20) a. オープンしたてのお店  
 b. 赴任したてのオーストラリア人  
 c. 抽出したてのコーヒー  
 d. セットしたての髪  
 e. 復活したての今  
 f. 卒業したての時

軽動詞「する」を基体にとる場合も、一般的な動詞と同様に内項をとるもの、外項のみをとるもの、基体が選択しない項以外のものが主名詞としてとりたてられるものが主名詞に生じて、これまで述べてきた例と同様の条件を満たすと、「たて」構文が生成される。

最後に、接辞「たて」と動詞を複合したものと主名詞が複合語となっている例を挙げる。

- (21) a. 焼きたてパン  
b. 焼きたてのり

これらの例は、一見すると、接辞「たて」に後続する助詞「の」が省略されたもののように見える。しかし、どちらの例もアクセント核が「たて」の「て」の部分に1つだけあり、規則的に複合語を形成しており、主名詞が「焼きたて」の一部となり全体で一語として振る舞っている。

また、以下の例では、主名詞が「たて」が形成する修飾節の前に付加して、全体で一語を形成する例である。

- (22) ペンキ塗りたて

しかし、このような例は多くなく、慣習的に使われる語であると考えられる。

本節では、これまで詳細が観察されてこなかった「たて」構文を観察した。基体動詞の表す出来事によって被変化主体に生じる変化自体をオノマトペとして生じるもの、被変化主体全体ではなく、その一部分となる価値を示すもの、他と比べて特に価値があるとみなされる「時」や「状態」といったものが主名詞となる例について観察してきた。これらに共通するのは、どれも森田 (1989) のいう付加的な価値となるものが主名詞として生じることである。

次節では、これまでの観察をもとに、「たて」構文を生成する理論的枠組みを提案する。

### 3. 提案

本節では、前節までに導いた「たて」構文が生成する基体述語の特性と主名詞についての一般化を概念意味構造とクオリア構造の観点から、理論的枠組みを提案する。「たて」構文の理論的枠組みについては、山田 (2005) が (9) の一般化をもとに概念意味構造から分析を提示しているが、この分析を礎にして、外項要素を主名詞とする「たて」構文や基体述語と項関係にない要素が主名詞となっている「たて」構文へと分析をひろげ、新たな理論的枠組みを提案する。

### 3.1. 概念意味構造からのアプローチ

本節では、主名詞が基体動詞と項関係にある要素が主名詞となる「たて」構文について、山田 (2005) の分析を礎として提案する。

山田 (2005) は、主に「たて」構文の主名詞が動詞の内項となる「たて」構文について、前述のように以下のような一般化を提示している。

- (23) a. 述語の描写する行為の終了後になんらかの生産物が生じることを予測する作成動詞／人・ものが生ずる出現・発生動詞  
 b. 述語の描写する行為によって影響を受ける要素の変化を含意するが、その変化を完全に含意しない変化動詞 (=(9))

山田は、(23) の基体動詞は以下のような概念意味構造を持つとしている。

- (24) a. 作成動詞：[<sub>EVENT</sub> x ACT (on y)] CAUSE [<sub>EVENT</sub> BECOME [<sub>STATE</sub> y BE AT-z]]  
 b. 出現・発生動詞：[<sub>EVENT</sub> BECOME [<sub>STATE</sub> y BE AT-z]]  
 c. 変化動詞：[<sub>EVENT</sub> y BECOME [<sub>STATE</sub> y BE AT-z]] (山田 (2005): 281)

接辞「たて」は、基体動詞が表す結果の価値をとりたてることから、これらの概念構造のうち、[<sub>STATE</sub> ...] の部分をとりたてると分析する。(24) の3つの概念意味構造はいずれもこの部分を持っており、ここを「たて」がとりたてて、被変化主体である y 項を主名詞として表出させる。

この分析から、[<sub>STATE</sub> ...] の部分を持たず、[<sub>EVENT</sub> x ACT (on y)] の構造しか持たない活動動詞(=(5))は「たて」構文が生成されないことが説明される。また、動作主は、(24a) の概念意味構造内の x の部分に生じることとなり、「たて」構文が主名詞として表出させる被変化主体の y 項とはならず、主名詞になれないとすることで、(3c-d) のような動作主を主名詞とする「たて」構文が生成されないことが説明される。

ここまでの提案から問題となると考えられるのが、以下のような状態変化動詞を基体とする「たて」構文の文法性である。

- (25) a.\* 壊したてのおもちゃ  
 b.\* 潰したての空き缶  
 c.\* 曲げたてのはりがね (=(8))

状態変化動詞の概念意味構造は、(24a) とほぼ同じで [<sub>STATE</sub> ...] の部分を含む。この部分を「たて」がとりたてて文法的な「たて」構文が生成されることを誤って予測する。そこで、山田 (2005) は、影山 (1996) の状態変化動詞の概念意味構造を採用し、(25) の動詞が持つ概念意味構造を以下のように規定して、問題の解決を図っている。

- (26) [EVENT x ACT (on y)] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BEAT-[SMALL-PIECES]]  
 (影山 (1996): 216)

(24a) と (26) の概念意味構造の違いは、(26) では [STATE ... ] 内の結果状態があらかじめ定項として語彙的に指定されていることである。接辞「たて」は、最終的な結果状態が未定のものを取りたて、被変化主体が基体動詞が意味する出来事の結果として新たな価値を生じることを表す。このため、既に変化のありようが指定されている (26) の概念意味構造を持つ動詞は、「たて」によってとりたてられないと分析される。

この分析は、向坂 (2013) が指摘する動作主を主名詞とする「たて」構文にも適用できる。前述のように、山田 (2005) では、以下のような例から動作主を主名詞とする「たて」構文は生成されないとしている。

- (27) a.\* とりたての農家  
 b.\* ぬりたての大工 (= (3c-d))

これは、前述のように主名詞として生じている要素が、[EVENT x ACT (on y)] の x を占める要素となり、[STATE ... ] 内の項に生じないことから予測される。これに対して、向坂 (2013) が観察する主名詞が基体動詞の動作主である例は以下である。

- (28) a. 薬学部を出たての新人  
 b. 小学校に入りたてのお嬢ちゃん  
 c. 巴里へ来たての外国人の男たち (= (10))

これらの例は山田 (2005) の提案にとって問題となると考えられる。しかし、向坂 (2013) は、(28) のような動作主を主名詞とする「たて」構文の基体となるのは、着点や起点と共に動作主の変化を表すものであるとする。このことは、動作主が自発的な動作よりも動作主自身の位置や状態の変化に意味の中心がある場合であるといえる。これを概念意味構造で捉えるために、(28) の基体述語の概念意味構造を考察する。

丸田 (1998) は、このような本来的には動作主体の自発的動作のみを表すものが着点や起点を得て、概念意味構造が本来の概念意味構造から変化するプロセスを提案している。

- (29) a. He walked.  
 [ x DO AN ACTION OF VOL ] INITIATE [ x WALK ]  
 b. He walked to the car.  
 [ x DO AN ACTION OF VOL ] INITIATE [ x WALK ] ] CAUSE [ BECOME [ x AT-z ] ]  
 (丸田 (1998): 189)

活動動詞である walk は (29a) のような主体的な動作のみを表す概念意味構造を持つ。(29b) のように、主体的な動作を表す walk に着点句である to the car が共起することで、概念意味構造が拡張され、動作の結果、その動作主体がある位置へと変化することを表す概念意味構造となる。

本稿でも丸田のこの分析を援用して、(28) の各例の基体述語のもつ概念意味構造を以下のように規定する。

(30) a.  $[_{EVENT} x \text{ ACT (on y)}] \text{ CAUSE } [_{EVENT} \text{ BECOME } [_{STATE} x \text{ BE FROM-z}]]$  (28a)

b.  $[_{EVENT} x \text{ ACT (on y)}] \text{ CAUSE } [_{EVENT} \text{ BECOME } [_{STATE} x \text{ BE INTO-z}]]$  (28b)

c.  $[_{EVENT} x \text{ ACT (on y)}] \text{ CAUSE } [_{EVENT} \text{ BECOME } [_{STATE} x \text{ BE TO-z}]]$  (28c)

本来、 $[_{EVENT} x \text{ ACT (on y)}]$  しか持たない「出る」「入る」「来る」といった動作を表す動詞が、着点句、起点句の付加によって (30) のような概念意味構造をそれぞれ持つようになる。これらの概念意味構造は、(24a) と同じように  $[_{STATE} \dots]$  の部分を持つ。この部分を「たて」がとりたてて、ここに生じる項 (x) が主名詞として生じることで (28) の「たて」構文が生成されると分析する。重要なのは、(30) の概念意味構造において、動作主体と変化主体が同一要素である x で、動作主体 x が自ら起点からの移動、着点への到着を含意することになることである。このことで、基体述語の表す動作主が被変化主体と同一であることがこの構造から読み取れ、この要素が「たて」構文の主名詞に生じることが説明される。

その一方で、(28) の例から起点・着点を取り除いた例は、以下のように非文法である。

(31) a.\* 出たての新人

b.\* 小学校に入りたてのお嬢ちゃん

c.\* 巴里へ来たての外国人の男たち

これらは (29a) と同じ概念意味構造を持つこととなり、「たて」がとりたてる概念意味構造を持ってないため、非文法となることが説明される。つまり、向坂 (2013) が観察する動作主を主名詞とする「たて」構文は、山田 (2005) の分析を拡張することで説明される。

また、山田 (2005) は、以下のような主名詞がオノマトペである例についても概念意味構造から説明できることを提案している。

(32) a. 揚げたてのアツアツ

b. やきたてのほかほか

c. 獲れたてのピチピチ

d. 出来たてのほやほや (= (17))

これの主名詞は、(24) の概念意味構造のうち、 $[_{STATE} y BE AT-z]$  の結果状態を明示的に示すことから、この結果状態を「たて」がとりたてて、「たて」構文が生成されると分析する。一方、(32) とは異なり、以下のようなオノマトペを主名詞とする「たて」構文は生成されない。

- (33) a.\* 炊きたてのグツグツ  
b.\* あげたてのドンドン

「グツグツ」「ドンドン」は、動作の様態を修飾するもので、(24) の概念意味構造のうち、上位の  $[_{EVENT} x ACT (on y)]$  の部分を修飾するものである。この部分を接辞「たて」はとりたてることができず、(33) の非文法が予測できる。

このように、「たて」構文は、基体となる述語の概念意味構造に  $[_{STATE} y BE AT-z]$  の部分を持つ時、その変化を担う要素を主名詞としてとりたてて生じる構文である。この構造内の  $y$  項に生じると主名詞としてとりたてられるため、被変化主体としてこの位置に生じれば、動作主であっても文法的な「たて」構文が生成されることが説明される。このことで、山田 (2005) が提案した概念意味構造による理論的枠組みによって、向坂 (2013) が観察した動作主体を主名詞とする例もその生成が一様に説明できることが明らかになった。

次節では、本節で取り上げなかった基体動詞と項関係にない要素が主名詞として生じる (18) の例について理論的説明を試みる。

### 3.2. クオリア構造

前節では、基体動詞と項関係にある要素が主名詞として生じる「たて」構文は、基体述語の概念意味構造からその生成が予測できることをみた。本節では、基体動詞と項関係にない要素が主名詞として生じる、以下のような例について理論的説明を試みる。

- (34) a. もぎたてのおいしさ  
b. 炊きたての甘み  
c. 焼きたての香り  
d. 摘みたてのバラの香り  
e. 入れたてのコーヒーの香り (= (18))

前述のように、これらの「たて」構文の主名詞は、基体述語の表す出来事の被変化主体自体ではなく、その主体のうち出来事の終了直後の状態で、特に価値のある部分としてとりたてられたものである。このことから、接辞「たて」は、被変化主体全体を

とりたてずに、全体のうち、とりわけ価値のある部分をとりたてているといえる。このことから、(34)の「たて」構文では、言語化されない変化主体の全体が談話内で想定され、その部分を主名詞としてとりたてている点が重要である。例えば、(34a)では、基体動詞の表す動作「もぐ」の被動作主である果物（例えば、りんご）が談話内で想定され、その果物に直接言及せずに、動作が終わった直後の状態の中から、りんごに生じるとりわけ価値のある「おいしさ」を接辞「たて」がとりたてている。

このように、被変化主体全体でなく、その部分についても「たて」がとりたてることができる理論的枠組みが必要となる。そこで、本節では、語の意味、とりわけ名詞句の意味についてその特徴を理論的に記述でき、概念意味構造と親和性の高い枠組みとして、Pustejovsky (1995)、小野 (2005) 等が主張するクオリア構造を検討して、前節までに提示した理論にこの枠組みを組み入れて、(34)の理論的説明を試みたい。

Pustejovsky (1995) 等が提案するクオリア構造では、語は他の語と弁別するため、4つに大別されるクオリアを持つとされる。例えば、*novel* という名詞は以下のようなクオリア構造を持つ。

(35) *novel*

Constitutive = narrative	(Pustejovsky (1995): 78)
Formal = book	
Telic = reading	
Agentive = writing	

Constitutive Qualia (構成クオリア<sup>1</sup>)とは、物体とその部分との関係を指定するクオリアで、主に、物体の材質、重さ、部分と全体の関係について指定する。*novel*の場合、その内容である「話、物語」が指定されている。Formal Qualia (形式クオリア)は、それがどのような種類のものなのか、いわゆる上位語となるもの、それが属する種となるものが指定される。*novel*の場合、「本」の種類の一つであるため、*book*が指定されている。Telic Qualia (目的クオリア)は、その物体が何のためのものか、どんな機能を果たすものなのかについての情報が指定される。*novel*は「読む」目的に使われることが(35)の目的クオリアから読みとれる。最後に、Agentive Qualia (主体クオリア)はその物体の起源に関するもの、またはその物体に生じるものが指定される。*novel*は書くという行為によって生じるものであるから、*writing*が指定されている。このように、語に内在する特徴を4つの構成要素として指定することによって、他の語と弁別される。

語の意味は一般的な知識によって定義されるものであるが、使われる状況によっては、その内在する特性、つまり、設定される値が変わることが十分に考えられる。たとえば、(35)の*novel*は、その目的クオリアに指定された特徴のように、一般的には

<sup>1</sup>各クオリアの和訳は小野 (2005) を参照した。

ある読者に読まれる対象である。しかし、小説家にとっての novel とは読むものというよりは、書くものである。この場合、目的クオリアに writing が指定されることになる。このように、ある語が使われる状況によって、多義となったり、特別な意味解釈を持ったりすることが4つのクオリア内に指定された要素の違いによって捉えられる。

本稿で特に注目したいのが、4つのクオリア構造のうち、物体のなりたち、つまり、あるものの部分的な構成内容を記述する「構成クオリア」である。本節で議論している(34)の例では、主名詞として本来とりたてられるべき被変化主体が全体としてとりたてられず、この主体の特質の一部で、とりわけ価値があるとみなされる特質が主名詞として生じている。この価値は、基体動詞の行為を受けた主体の一部であると考えられる。そこで、 $[_{STATE} y \text{ BE AT-z}]$  の概念構造の y 項に出現する名詞のクオリア構造を導入して、(36b)のように仮定する。接辞「たて」は、y 項として生じ、「たて」構文の主名詞として本来登場するはずの名詞句の構成クオリアを参照し、そこに指定された素性の中から特に価値があるものを取りたてて、主名詞にすると分析する。「たきたてのおいしさ」は(36)のように分析される。

(36) a.  $[_{EVENT} x \text{ ACT (on } y)] \text{ CAUSE } [_{EVENT} \text{ BECOME } [_{STATE} y \text{ BE AT-z}]]$

b.

ごはん
Constitutive = おいしさ
Formal = たべもの
Telic = 食べる
Agentive = 炊く

(36a)は、「たく」の概念構造である。(36b)はその被変化主体である y 項のクオリア構造である。「たて」はこのクオリア構造内の構成クオリアを参照して、そこに指定された「おいしさ」を取りたてて「たて」構文を生成する。

このように、概念意味構造に加え、この構造内に生じる被変化主体である y 項のクオリア構造を指定し、その中の物体の部分と全体を規定する構成クオリアに指定される特質を接辞「たて」がとりたてて主名詞として表出することで、「たて」構文が生成されると提案する。

ここまで、基体動詞の項構造に指定されない要素が「たて」構文の主名詞として生じる例について、これまでの分析にクオリア構造の理論を加えることで理論的に捉えられることを示した。本節で議論した「たて」構文の生成は、基本的には項関係を持つ要素が主要部にもつ「たて」構文と同じ概念意味構造から説明されるが、 $[_{STATE} \dots]$  に指定される y 項全体を取りたてるか、そのクオリア構造内に指定された特質の一部を取りたてるかという違いのみで両方の「たて」構文の生成が理論的に捉えられることを主張した。

### 3.3 まとめ

本節では、概念意味構造とクオリア構造の2つの理論的枠組みを援用して「たて」構文の説明を試みた。「たて」構文は、基本的には(24)のようなその内部に[STATE y BE AT-z]の部分をもつ概念意味構造を持ち、かつ、結果状態が定項ではない構造が基体となる。また、この構造のy項に生じる要素を接辞「たて」が主名詞としてとりたてることで生成すると分析した。[STATE .....]内に生じる項であれば、内項、外項を問わず「たて」がとりたてるので、向坂(2013)が指摘する動作主が主名詞となる「たて」構文であっても、その生成が正しく予測される。

また、オノマトペを主名詞とするものは[STATE .....]内の結果状態を、被変化主体の部分となるものが主名詞となる例は、y項のクオリア構造を参照して、その中の構成クオリアの要素で特に価値があると判断されるものがとりたてられて、「たて」構文が生成すると分析した。

次節で、本稿をまとめて、本稿の問題、今後の課題について述べる。

## 4. 結語

本稿では、「たて」構文について、これまで観察されてきた事実の精査と新たな事実の観察から、この構文の構成要素である基体動詞と主名詞の関係から一般化を試みた。「たて」構文が生成可能な動詞とは、何らかの位置または状態の変化を含意するが、その変化が語彙的に指定されていない動詞である。また、主名詞は、典型的には他動詞の被変化主体である内項であるが、動作主も動詞の表す状態や位置の変化を被る主体と同一であれば、この構文の主名詞となれる。また、被変化主体が変化の様態を表すオノマトペや変化主体の一部となる要素でその部分に価値がある時、これをとりたてて主名詞とすることができる。

そして、本稿では、概念意味構造から動詞の内項要素とオノマトペ主名詞の観察から導いた「たて」構文の生成を理論的に説明する山田(2005)の分析が、主体名詞が基体動詞の内項だけではなく、向坂(2013)が観察する外項の例についても、その生成を正しく予測することを示した。また、これまで理論的説明を与えられてこなかった、主名詞が基体動詞と項関係にない例についても、概念意味構造に加えて、主名詞として本来、とりたてられるべき名詞句が持つ構成クオリアに指定される特性を接辞「たて」が参照し、それを主名詞として表出させると分析することで、理論的に説明できることを提案した。

しかし、本稿は、以下のような「たて」構文について、適切な理論的説明を与えることができなかった。

- (37) a. 大学に入りたての頃  
       b. 就職したてのとき  
       c. 洗いたての場合

d. パーマをかけたての状態 (= (19))

これらは、基体述語が表す出来事の終了直後の時点、状態などが他と比べてとりわけ価値があることを表している。これらの例の主名詞は、基体動詞の項ではなく、また、それが表す出来事によって引き起こされる結果状態を示してもいないため、概念意味構造から予測できず、また、主名詞として本来、とりたてられるべき名詞句が持つ構成クオリアにも指定されない。このような事実の説明が今後の課題となる。

また、接辞「たて」のような動詞に接続して、連体修飾節を形成する形態素は、動詞のアスペクト的特徴を明らかにする際、言語の普遍性と個別性の観点から、これまでのアスペクト研究とは異なる理論的貢献が期待される。普遍的には、これまであまり中心的に議論されてこなかった名詞句内に生じる動詞的要素のアスペクトについて詳述することで、述語のアスペクト研究に貢献できること、個別的には、日本語の「たて」「かけ」(cf. Kishimoto (1996), Tsujimoto & Iida (1999) 等)「さし」など日本語に独自にみられる形態素がどのようなメカニズムによって基体述語のアスペクトを切りとるのかの観点から理論を構築することで、日本語の形態要素と述語のアスペクトの関係を明らかにすることができると思われる。

参考文献

- 影山 太郎 (1996)『動詞意味論－言語と認知の接点』くろしお出版  
 Kishimoto, Hideki. (1996) Split intransitivity in Japanese and the unaccusative hypothesis. *Language* 72, 248-286.  
 益岡 隆志 (1987)『命題の文法』くろしお出版  
 丸田忠雄 (1998)『使役動詞のアナトミー－語彙的使役動詞の語彙概念構造』松柏社  
 森田 良行 (1989)『基礎日本語辞典』角川書店  
 向坂 卓也 (2013)「動作主修飾の「V かけの NP」「V たての NP」」*KLS* 33, 205-214.  
 関西言語学会  
 Pustejovsky, James. (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, Mass: MIT Press.  
 小野 尚之 (2005)『生成語彙意味論』くろしお出版  
 Tsujimoto, Natsuko and Masayo, Iida (1999) Deverbal nominal and telicity in Japanese, *Journal of East Asian Linguistics* 8, 107-230.  
 山田昌史 (2005)「『たて』構文の分析」*レキシコンフォーラム* 1号 267-293. ひつじ書房